少年の異世界戦記～ＩＳ編～

クロイツヴァルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年の異世界戦記～ＩＳ編～

【Ｎコード】

Ｎ７０７１Ｙ

【作者名】

クロイツヴァルト

【あらすじ】

次に渡った世界はインフィニットストラトス通称ＩＳと呼ばれる汎用性の高い人が着るパワードスーツがある世界であった。

0話（前書き）

友達に薦められた小説やアニメを見て創作意欲に任せて書きました。
この小説内で一部のキャラクターの性格が違うと思いますが嫌な方
はクリアバックを推奨致します。

0話

ーーーＩＳ学園第一アリーナーーー

《これより入試実技試験を始めます。受験者は対戦相手を量産機又は専用機を用いて戦って下さい。》

「わたしが試験官とはな…相手には悪いが本気で行かせて貰うか」

ピットの中にある侍をモチーフにした感じの機械の前に佇むのは切れ長の瞳に長身でモデル顔負けのプロポーションと美貌を持ち、黒い髪を腰元まで伸ばした女性が学園指定の教員用ＩＳスーツに身を包んで立っていた。

「ちーちゃんが本気を出したら入試の子が可哀想だね～？」

そしてその女性の傍らに立つのはメイドドレスに身を包むピンクの長髪を持つ同い年の様な女性……頭の上…カチューシャと思われる兎耳がひとりでに動いているのは謎である。

「束が他人に興味を持つとは昔は考えられなかったな」

ちーちゃんと呼ばれた女性は感慨深く傍らに立つ女性…束と呼んだ人物に昔の事を喋る

「それはやっぱり〈あの人〉のお蔭かな？」

「いま頃何処で何をしているのだろうな……」

女性はＩＳ越しに遠くを見つめる様にしていた。果たして女性は何を見ていたのかは傍らに立つ束にしか解らない。

「この六年間ずっと探しているけど行方知れずだからね」

「（第二回モンドグロッソ世界大会の時に誘拐された一夏の近くにいた人の証言が正しければ金髪の血の様な瞳を持った人物はわたしは１人しか知らない）そうだな。」

「二回目のモンドグロッソの時にいっくんを見つけた時にあの人かと思ったけどちーちゃんはどう思う？」

「（同じ事を考えていたようだな）確証がなければ何とも言えないな……打鉄の用意は？」

「準備完了してるよ～♪ちーちゃんが思い切り動かしても壊れないから安心して良いよ～♪」

「いつも束の腕の事は信頼している」

「ちーちゃんそれは酷いよ～（泣）」

「あぁもう！引っ付くな！次の受験者はわたしが受け持つんだぞ！」

《織斑先生、受験者の準備が整いました。》

「解った。山田先生受験者のＩＳ情報は？」

《それが……》

女性の声に通信をしてきた山田先生と呼ばれた女性はどう答えていいか戸惑っていた。

「どうした？」

《受験者のＩＳ情報ですが六年前に世間を騒がした機体なんです。》

「……ヴェルフェゴール」

「７つの大罪を犯した悪魔の名前で六年前の〈あの事件〉の時に束さん達が表だとすれば裏で動いていたとされた機体の名前だね。（そしてあの人が乗っていた機体でもあるんだよね？…でも六年経ったいまになって現れたのかな？）」

《御存知でしたか？》

「まぁ…な。あの時の当事者だからな」

《そうですか。》

「機体の情報はあるのか？」

《あ…はい！あります！機体名はヴェルフェゴールで拡張領域や後付け装備が無い事や操縦者を生命（いのち）の危険から守る絶対防御機能が無いなどと慨存するどのＩＳとも違う設計です。装備数はかなりの量なので織斑先生のＩＳに直接送ります》

「解った。山田先生、準備が出来たら合図を頼む。」

《わかりました。》

そして片膝を着いている打鉄のコクピットの様な座席に座る様にして女性が座ると体を固定或いは纏うかの様にして体の肩や脇腹などに機械が取り付けられる。

「ちーちゃん、気を付けてね？もしかしたら」

「解っている。例え相手が〈あの人〉であったとしても手を抜いたりしたら怒られてしまうからな…」

《織斑先生お願いします》

「解った。束は下がってろ」

「は～い♪」

ＩＳを纏った女性の傍から束は素早く離れるのを見てピットに設置されているカタパルトに乗って飛び出した。

「あれか。（全身装甲型（フルスキン タイプ）とは益々持って〈あの人〉を思い出してしまうな。）」

ピットから飛び出した女性の視界に最初に目に入ったのは全身を完全にＩＳで身を包んだ機体見る人物に恐怖感を煽る様な風貌…そして一番の特徴は鬼を模して作られた顔に全身が真紅に塗り潰されている事と背中に背負った形でカーキ色の二枚の巨大な盾である。

「受験者番号２００１番所定の位置に着いたな…今回お前の試験官を勤める事になった織斑千冬だ遠慮は無用だ。全力で掛かって来い

！（もし〈あの人〉なら確実に初手は遠距離からの攻撃の筈……）」

そして女性…ちーちゃんこと織斑千冬と名乗った女性の予想道理に相手は片手に持った突撃銃を乱射して接近してきた。

「（銃撃は囮…本命は）そこだ！」

千冬は誰もいない空間に打鉄に装備されている刀を振るうと甲高い金属音が鳴る。

「不可視の刀を使う事など解っている！」

千冬は相手の刀を切り払ってその勢いに任せて返しに逆袈裟に斬りつけるがその真紅の装甲には傷一つ着けられなかった。

「装甲は昔と同じか！」

千冬はそのまま距離を取ろうとした瞬間（とき）打鉄が動かなくなってしまう。

「なにっ！？」

『禍ノ生太刀（マガノイクタチ）』

何故か身動きが取れない打鉄に対して相手は掌を打鉄の肩に添えると打鉄のエネルギーゲージが急激な減少を始め、あっと言う間に０にされてしまった。

《じゅ、受験者番号２００１番の勝利です！両者は所定のピットに

戻って下さい》

「一体なにが起きたのだ？」

わたしが考え事をしといると相手が手元を何かを振る動作をすると纏わりついていた何かから打鉄が解放されたのを感覚で感じはっと我に帰ると相手はわたしに背を向けてピットに戻って行く最中であった。

「相手の素顔が確認出来なかったがあの戦い方……やはり貴方なのですか…戒翔さん」

千冬は真紅の機体にか細い声で喋ったがその真紅の機体は何も答えてはくれなかった

0話（後書き）

御意見や御感想をお待ちしております。

第一話　再会の時

ある学園に俺こと黒逸戒翔は神界からこのＩＳの世界にスカリエッティの調査依頼の為に現界していた。……其処までは良い。

『何故、こうなったυ』

「それは俺も同感ですυ」

俺ともう一人の男子…織斑一夏。どうやらコイツは入試の時にＩＳ（インフィニットストラトス）を作動させてしまった事によりこのＩＳ学園に入学する羽目になっていた。

俺が何故この様な所にいるかと言うと…あの変態科学者の提案に乗ったのがいけなかったと言うのが一番の後悔であった。で、何故後悔していると言うと……

（男子２人に対して他の面子が全員女子ってどんだけだよυ）

と、俺が思考にふけていると隣から何かを殴る音が聞こえ其方に目をやるとうずくまる織斑とその傍らに殴ったと思われる黒いスーツを身に纏った女性が立っていた。

「学園内では織斑先生と呼べ」

そう言って織斑と言った女性は副担任の山田真耶の横に立つ。

「これからお前達を鍛えていく、織斑千冬だ。この３年間で使い物になる様に鍛えていくつもりだ。出来なくとも返事をしろ！」

「「はい！」」

そして、その後に続く自己紹介で……

「……以上です！」

まぁ、普通に自己紹介した織斑に対して周りは滑っていたのはスルーしておこう。そして……

「黒逸戒翔くん。」

山田真耶先生に呼ばれて俺は返事をした後に席を立つとクラスの視線が一気に集まるのを感じる。

『黒逸戒翔だ。諸事情によりこのＩＳ学園に来たが解らない事も多々あるが宜しくお願いします。』

「えっと、戒翔くんは専用機を持っているって聞きますが何を持っているんですか？」

『専用機って言うよりはオリジナルに近い物ですね。自身の理論を使ってＩＳとは違う核（こあ）を使っていますからね。ただ、それを教えろとか強要するのであれば抵抗させていただきますが……』

その事に先程までオリジナルのＩＳを持っている事に騒いでいたクラスが沈と静まる。

「いえいえ、篠ノ乃束博士以外に自身で開発した事が本当かどうか知りたかっただけですから」

『それだけなら良い…。』

そして俺が席に座ると織斑から声を掛けてきた。

「やっぱり、戒翔は独学でＩＳを作ったんだな？」

『やっぱり？後は今度教えてやるから取り敢えず……』

「取り敢えず？」

「前を向け…この馬鹿者が」

そして織斑が前を向いた瞬間、呻き声と共に席から落ちる。

「生徒が自己紹介している最中に無駄話とは良い度胸だな……」

「ご、ごめん。千冬姉」

「学園内では織斑先生だ。」

それ以降は無事にクラスの自己紹介が終わり、織斑教諭が教壇の前に立ち口を開く。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

そう言った瞬間、クラスの俺と同じく男である一夏を残して他の女子達が黄色い声を叫び教室内に木霊した。

「はぁ、何故わたしのクラスにはこうも馬鹿ばかり集まるのだυなにか？わたしの所には馬鹿ばかりが集まる様になっていると言うのか？」

そんな織斑教諭の言葉は絶叫と言うか悲鳴に近い声にかき消されてしまう。織斑教諭心中お察しするよυ

そして休み時間の時…。

「そこのお二方、少しよろしくて？」

「はい？」

『ん？』

「このセシリア・オルコットが話し掛けたのになんて気の抜けた返事をするの！？」

「いや、俺知らないし…戒翔は？」

『俺も知らないな……』

「学園主席合格でイギリス代表候補生のこの私を知らないですって！？」

「ごめん…」

『まったくと言って知らないな……』

「なっ！？」

セシリアと言う女生徒が驚愕を露わにしている時、神界からの通信が入った為に懐から携帯を出す。

『すまん、電話だ。』

そして、窓際に移動すると携帯を耳に当てながら通信を開く。

《やぁ、其方の世界はどうかな？》

『そこそこ面白いがやはり面倒だな…。お前はこんな世界（ところ）で何を調べたいんだ？』

《なに、その世界のＩＳの技術に興味があってね？君の使っているデバイスとは違う意味で面白いと思ったからだよ？》

『まったく、無限の欲望（アンリミテッドデザイア）……コードネーム通りの思考だな？』

呆れを含む声にスカリエッティは気にしないとばかりに笑う。

《意味合いをそのまま体現出来るのはわたし位だろうね？クローンとしても科学者としてもね？》

『何か解れば此方から連絡を入れる。』

《わかっ……あぁ、そう言えば其方の世界に空間の歪みを観測したからね？そっちの方も取り敢えずは気に掛けて置いてくれるかね？》

『歪み？』

訝しげに聞くとスカリエッティは真剣身を帯びた声でそれに答える。

《何者か解らないが何らかの干渉をして来たと見て良いだろうね。》

『そうか…。取り敢えず、その件に関しては此方でも調べるが、何か新しく解れば連絡をくれ。もしかしたら転生者かも知れないな…。』

《わかったよ。それじゃ、誰かその件での捜査要員で派遣した方が良いかも知れないね？》

スカリエッティの言葉に暫し思考に入る。

『……冷静さと機械に精通している奴と考えるとなると……なのは、フェイト辺りが良いかも知れないな…。』

《確かに……彼女達のどちらかを送った方が君としても動きやすいだろうね？彼女達のどちらかを送る時には連絡を入れる事にするよ。ただ、高町…いや、今は君の奥さんだったね？彼女の悪い癖みたいな物が出ないと良いね？》

『不安要素の１つを言わないでくれぃ』

《ふふふ、ではまた。時の守護神、黒逸戒翔君。》

そして通信が切れるのと同時に携帯を懐にしまうと先程から此方を

睨み付けていたセシリアがズンズンと擬音が付きそうな足取りで此方に近付いて来る。

『はぁ、面倒なのに目を付けられたなぅ』

「そこの貴方……」

そして、セシリアが口を開いた瞬間、始業の鐘が鳴る。

『残念だったね？セシリア・オルコットさん。』

「〜〜〜〜後日改めさせて貰いますわ！！！」

セシリアの言葉を背に受けながら俺は席に着く。傍らには俺が通信中、ずっとセシリアと話していたのか机にぐったりと横たわる一夏がいた。

『……大丈夫か？』

「だ、大丈夫。こんな所でへこたれてたら……地獄が……」

『なんだそれ？』

「あ、いや…何でもないよ？」

『……そうか？』

一夏の言葉に違和感を覚えながらも一応警戒はして置いた方が良いかも知れないな…。杞憂に終われば良いが……

その後も何の問題も無く授業は進んで行き、寮へと向かったが……

『女子ばかりだから当たり前…か。』

決められた部屋へ行く道程には至る所に女子、女子、女子と遭遇するばかりである。

『此処…か。』

俺はそのまま入ると2人部屋の様で同室の人間は既に帰って来ている様子でベッドの傍らに竹刀と木刀が突っ込んである鞄が置いてあった。

『剣道…か。』

それを眺めていると……

「誰かいるのか？私は篠ノ乃箒だ…この様な姿で……」

『此処の寮室になった黒逸戒…翔だっ！？』

「……なっ、何で男が居るんだ！？」

『何でって俺はこの部屋だからって…』

そして、その篠ノ乃箒と言う女生徒の方に振り向いた。……それがいけなかったのだろう。

「みっ、見るなぁーー／／／／／／／／／／／／／／／！！！！」

『ちょっ！？』

少女は羞恥のあまりに限界を超えた力で戒翔の水月…鳩尾に拳をもらい仰向けに倒れる。
そして、戒翔が最後に見たのは自身で殴った事に対してなのか防ぐなり避けるなりしなかった戒翔に対してかは解らないが驚愕の表情になっていたのであった。

『（まぁ、女子しかいないと言う事を忘れた俺が悪いからな…。）』

戒翔はそんな事を考えながら意識を闇に落とすのであった。

ーーーｓｉｄｅ箒ーーー

「みっ、見るなぁーー／／／／／／／／／／／／／／／！！！！」

『ちょっ！？』

わたしは恥ずかしさの余りに全力で男に人体の急所の１つである水月…鳩尾を咄嗟的に殴ってしまった。

「えっ！？」

相手が防ぐか避けるだろうと思っていたが相手の男はそのどれも行動に取らずに素直にわたしの拳を腹にうけるとそのまま仰向けになり昏倒してしまった。男の容姿を確認したわたしは驚愕した。

「な、何故戒翔兄さんがいるのだ？」

わたしの問い掛けは気絶させてしまった戒翔兄さんには無意味な物だがそれをせずに居られなかった。ＩＳならいざしらず肉体面では戒翔兄さんがわたしの拳などどうとでも出来た筈だから……

「と、取り敢えず着替えるとしよう／／／／」

冷静になって考えると今の自分の格好はタオル一枚を体に巻いた状態な事に気付き慌てて着替えの胴着に着替える事にする。気絶させた事は悪いがわたしもこのままではまた同じ事に成りかねないと思ったからだ。

そして、着替え終わって手持ち無沙汰に戒翔兄さんが目を覚ますのを待ちながらわたしはその様子を見ていた。

「髪は金髪に目鼻も整っているし、殴った時に感じた筋肉質な体……それに全てを魅入られさせる様な紅と蒼色のオッドアイに落ち着いた物腰…包容力があって理想的な男性としては……ってわたしは何をしているんだぁーー！？／／／／／／／／」

そんな事をしていると気絶させてしまった戒翔兄さんが目を覚ました。

『う……』

「だ、大丈夫か？」

目を覚ました戒翔兄さんにわたしは咄嗟とはいえ、殴ってしまった

事による後ろめたさにどもってしまう。

『いや、大丈夫だ。それに殴られても仕方ないからな…。』

「そ、そうだ！わたしの入浴上がりの姿を見たのだからな！……でも戒翔兄さんなら」

『それは悪いと思っている。元々が女子ばかりだと言う事を忘れていた俺が悪いからな…。それと最後の方が聞こえなかったが何か言ったか？』

わたしの言葉に戒翔兄さんは自分の非を潔く認め、謝罪をしてくる。

「しかし、何故戒翔兄さんと同室なのだ？男女七歳にして同衾せずだと言うのに……」

『それは俺にも解らない…。箒は見ない内に可愛くなったな…。』

「なっ！？／／／／／／／／きゅ、急に何を言い出す！」

『すまん、すまん。先ずは入浴などの時間の割り振りを決めないとだな…。』

戒翔の言葉にわたしも同意見な為に異論はなかった。

「まず、わたしの入浴時間が部活を終えてからになるから7時から8時まで、そして戒翔兄さんの入浴時間が8時から9時だ。」

『部活は剣道か？』

「わたしの目標は戒翔兄さんみたいに強くなる事ですから」

『俺が目標？（やはり記憶にないだけで俺と言う存在がＩＳ世界の一部の人間の中には俺を知る人間が何人か存在している様だな…。）』

戒翔兄さんはわたしの部活を聞くと少し考えている素振りを見せるとわたしの顔を見ると意外な言葉を発してきた。

『その剣道の見学に行っても良いか？』

「戒翔兄さんが？」

『まぁ、な。剣術を嗜んでいるから剣道だとどう違うのか気になってな？』

「剣術って、戒翔兄さんが昔に千冬さんに教えていた？」

『まぁ…そうだな。』

「戒翔兄さんは剣を握る時の心構えと言う物はなんですか？」

『自身を最強たるな常に最高であれ…。』

「戒翔兄さんが良く千冬さんに言っていましたね」

『あぁ、自身の力に傲らず更なる高見を目指す…そんな意味合いを持っているからな。』

そして戒翔は首下から剣状のペンダントを……

「それは戒翔兄さんの専用ＩＳ？」

『ん？そうだが、それがどうしたんだ？ＩＳは皆持っているだろう？』

「専用機は全員が持っている訳ではないんです。極僅かのそれも選び抜かれた者しか持てない希少な物だ。ましてや自作でＩＳを造ったなどと姉さんですら核（コア）のみで他の部分は他の国で作っていたんですよ！」

『其処まで驚く事か？やろうと思えば核（コア）は他の国がどうかは知らないが俺は既に束から教えてもらっていたからな…後はその仕組みを他の管制ユニットとジェネレーターの複合型に仕様を変更して他の物は慨存の技術の枠から外れてはいるな？』

「戒翔兄さんには驚かされ過ぎて反応に困りますよ」

『基本理論もしっかりしてはいるし何重にも張った強固な防御（プロテクト）がされているから俺のＩＳを調べられても問題はない…。』

「もうなんて言って良いか解りませんよ」

『ま、詳しい話は後にして明日に備えて寝るか。』

「そうですね。」

『「お休み。（なさい。）」』

そして二人はそれぞれの寝台に入り眠るのであった。

第二話　敵の襲来？いや憑かれただけｕ（前書き）

今回の話で神話に出てくる悪魔をモデルとしたキャラクターが出て来ますが詳細の設定が未定ですのでこの回に出て来るキャラクターの名前とその詳細の応募をしたいと思います。期限は特に決めませんのでお願い致しますｍ（＿＿）ｍ

第二話　敵の襲来？いや憑かれただけυ

『クラス代表戦？』

「あぁ、各クラスの代表同士で戦ってクラスＮｏ．１を決める物だ。」

『へぇ、クラス対抗戦をＩＳを使っての大掛かりな物にした物か。』

翌日の朝、戒翔と箒は同じテーブルで朝食を取っていた。そこへ……

「ねぇねぇ、あの男の子が噂の自作のＩＳを持った子？」

「かなりイケメンだね♪」

「あっ！だからって抜け駆けは駄目だよ？」

「篠ノ乃さんとどういう関係何だろうね？親しそうな感じだけど…」

周りでは昨日の続きとばかりに女の子達が戒翔と箒…主にその注目は戒翔と少し離れた場所で朝食を寂しく取っていた一夏に注がれていた。

『まったく、見世物では無いのだがな…。』

「仕方ない事だ。男でＩＳを使える戒翔と一夏はわたし達に取っては珍しい存在なのだからな？」

『それはそうだが…』

「く、黒逸君隣良いかな？」

『ん？別に良いぞ、席を占領してる訳では無いからな。』

戒翔と箒が朝食を取りながら雑談をしていると3人の女生徒が戒翔へと話し掛けてくる。その様子を見ていた他の女生徒達がなにやら騒ぎ出した。

「黒逸君って朝からそんなに食べるんだね？」

「や、やっぱり男の子だからかな？」

『そいつは偏見と言うものだ。男でも少食な奴もいれば女でも大食らいの奴がいるのだからな……まぁ、俺は結構食べる方だな。』

「黒逸君の話し方って少し難しく感じるね？」

『済まんな。どうも知り合いに科学者がいるもので論理的に考え、喋る節があるみたいでな？』

「へぇ～、そうなんだ。その人ってどんな人なの？」

『そうだな……一言で言えば変人だ。』

「へ、変人？」

『だが、アイツは天才だ…今ある技術の最先端を1人で作る事も可能でこのオリジナルＩＳの二機も基本理論をアイツとの共同で制作したのだからな。』

「凄いんだね？」

『性格には多少の難があるが信頼をしているからな…。』

「ほぇ～。」

戒翔がスカリエッティの事を話していると食堂の真ん中に織斑千が現れ、号令を掛けていた。

『ふむ、そろそろ行くか。』

「「「食べるの早っ！？」」」

『普通だろ？』

「いやいや！？普通はもっと時間が掛かるよ！？」

『そんな事よりも早くしないと余計に拙い事になるぞ？』

戒翔が席を立ち部屋に戻る所に一夏が廊下の隅の所に立っていた。

『どうした一夏？もうすぐ登校の時間になるが支度は出来ているのか？』

「いや、戒翔兄がなんでこの学園にいるのかを聞きたかったから待っていたんだ。」

『俺が此処にいる理由？』

「俺は良いんだけど、６年間も音沙汰無しで千冬姉や箒に束さんがどれだけ心配したか解ってるか？」

『（一夏の証言からして俺は過去に存在し彼女達とは深い関わり合いがあったと言う事か…）そうか…それは済まない事をしたな…。』

「戒翔兄さん、こんな所で立ち止まってどうしたのだ？」

『いや、何でもない。早く行くか？』

「当たり前です」

そして、部屋に戻って着替えを済ませ、一夏を入れた3人で寮から出て、真っ直ぐ学園に向かった。

－－－ＩＳ学園１－１－－－

「今日の時間は昨日言い忘れていたのだが、再来週に行われるクラス対抗戦の代表を決める。クラス代表者に推薦したい者がいるならば言え。また、立候補でも構わん。」

ＳＨＲにて織斑教諭が開口一番に言った言葉に周りはざわめきだす。

「クラス代表者とは意味はそのままでクラスの委員長で生徒会の開く会議やその他の委員会への出席…まぁ、簡単に言えばクラス長と言う事だ。そして、クラス対抗戦とは入学時点での実力推移を測るものだ。今の時点での実力には大差がないが、競争による向上心を生む。無論だが、クラス長は一度決まるとどんな事があろうと一年

間は変わらないからそのつもりで」

つまりはクラス全体を見る役割をすると言う事か…。管理局の総帥をやってた頃に比べれば楽だが、周りが女生徒と言う事で面倒になる事は確定だなυ原作だと一夏が指名されていたがどうなるだろうな……

「ハイハーイ！黒逸君が良いと思いまーす♪」

「わたしは織斑君が良いでーす♪」

『（予測通り…か。しかし、推薦された者に拒否する権利は無い…とはな。）辞退する権利位は欲しい物だな…。』

「候補者は織斑一夏に黒逸戒翔か…他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ。それと黒逸それは推薦した者に対して失礼な発言だ」

周りの女生徒の視線は彼等ならなんとかしてくれると言うなんとも他力本願な期待を込めた物である。

「さて、他にはいないのか？いないのなら2人のどちらかに投票あるいは実力差のある方を選ぶ事になるぞ？」

「待って下さい！納得が行きませんわ！」

織斑教諭のそんな言葉に机を叩き、悲鳴に近い声を上げる女生徒がいた。

『（あれは…確か昨日の…名前はセシリア・オルコットだったか？またややこしい事に成りそうだな…。）』

「その様な選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥曝しですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにその様な屈辱を一年間も味わえと言うのですか！」

セシリアの興奮は更にエスカレートし、とんでもない事を言い出す。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからと言う理由で極東の猿共にされては困ります。わたくしはこんな島国にまで来てＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスなどをする気は毛頭ございませんわ！」

『（イギリスもそんなに変わらないと思うが……人の事を猿呼ばわりとは少し高町式のおはなしをした方が良いかもしれんな…？）』

俺の考えなどいざしらずセシリアは暴走機関車の如く更に加速していく。

「いいですか！？クラス代表は実力のトップがなるべきもの…つまりこのわたくしですわ！」

『また、詰まらない事を……』

俺がぼやいていると丁度教壇のある方を見ると織斑教諭が眉間に皺を寄せて米咬みの部分を軽く抑えているのが見えた。

『（織斑教諭も苦労人属性を持ってるんだなぅ）』

そんな事を考えていると

「大体、文化としても後進的なこの国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとって耐え難い苦痛で――」

『（流石に言い過ぎだな…。）其処までだ。それ以上は個人に対する侮辱にすらならないぞ？』

「事実のはずですわ。それよりも猿がこの高貴なるわたくしに抗議するなんて身の程を知りなさい！」

『国と国では文化の違いがあって当たり前だ。それに不満を言うのであれば来なくても良いだろう。しかし、それを踏まえて来ているのであれば不満を言うのは既に不満などではなくただの我が儘にしかならんぞ？』

「なんですって！いつこのわたくしが我が儘を言ったと言うのですか！」

『ふむ、自覚すらないとは…救いようがないな。それと勘違いしては困るがお前1人がトップの実力を持っている訳では無いんだぞ？探せば状況に応じてお前を超える奴は幾らでも出てくるぞ？』

「なっ！聞き捨てなりませんわ！このような侮辱をこのセシリア・オルコットこのような侮辱を受けたことはありませんわ！こうなったら…決闘ですわ！」

『良いだろう。貴様のその傲慢（プライド）を叩き潰してやろう。その後は俺と一夏のどちらかを代表にするか決める……それで良いですか織斑教諭？』

俺がそう言うと今まで俺とセシリアの口論とも言えないただ挑発するだけの事を静かに見守っていた織斑教諭が静かに口を開く。

「円滑に進めてくれるのは助かるが勝手にやられては教師であるわたし達の立華も考えてくれ。」

『すみません。なにぶん勢いに任せてしまったもので……』

「理解したならぱ良い。勝負は来週の月曜の放課後…黒逸にセシリアそして織斑は用意をしておくように。それでは授業を始める」

織斑教諭が教室の空気を切り替えるかの様に掌を打ち鳴らし、山田教諭に教壇を代わり自身はまたドアの近くに立つと教室全体を見回せる位置に陣取っていた。

『（取り敢えず他のＩＳの基本操作に特性を覚えるか…。）』

そして、時間は進み放課後へ……

「戒翔兄さん、大丈夫なのか？」

『なにがだ？』

「あのセシリアとの勝負です。アレでも専用機持ち…生半可な事では勝てませんよ？」

『その事か。』

「その事かって貴方は…『使用ＩＳ名ブルーティアーズイギリス製第三世代機でその名前の由来はそれに装備される第三世代試作兵機で遠隔操作される６基のＢＴ兵器が特徴だが操作している間は操者であるセシリアが他の行動をする事が出来なくなる欠点を持つ。主武装の説明もいるか？』……いや、いい。」

「黒逸君っていつの間にそんな事を調べてたの？」

「そ、そうです！この短い間にいつの間に調べたんだ！」

『いつの間にって……昨日のいざこざの後に専用機持ちの情報を集めただけだぞ？データはアルと８の中にバックアップを含めた物を入れてあるし情報を集める事は情報戦とも言い戦う前には基本な事だぞ？』

「確かにそうだけど弱点まで調べられる物なの？って言うかＩＳにデータを保存出来る物なの？」

『入試の時の戦闘映像があってそれを数回見れば直ぐに気付くと思うが…ＩＳにデータの管理や機体の調整と管理を任せる為に人工ＡＩの管制人格を組み込んであるんだ。』

「オリジナルだから出来る事なの？」

『そもそもＩＳの基本理論に俺の独自の理論を組み込んで作ったのがこの二機で拡張領域（バススロット）に後付け装備（イコライザ）を廃してデータ管理に複数の機体の調整と管理をさせている。』

「そうなんだ」

『コイツ等は独自に考え時には助言をくれたりするし時には口論になる事もあるな…。』

「凄い高性能なＩＳだね。」

『最高の相棒達だな…。』

「戒翔、少し良いか？」

『なんだ？』

「いいから来てくれ。」

『あぁ、わかった。すまんな』

そして、箒の後をついて歩いていくと校舎の屋上に出る。

『放課後でこんな場所になんの用が……』

「なんで今まで連絡をくれなかったんですか！」

『……』

「何故一言も言わずに……何故なんですか！！！」

『それは……』

戒翔がどう答えた物かと考えていると首に下げた剣十字を模したネックレスの待機状態のアルから警告音が鳴り響く

「な、なんだ？！」

《マスター！この場の空間に異常な歪曲場の発生を感知！何かが来ます！場所は……ＩＳ学園屋上の噴水付近！》

『なんだと！？箒、話は後だ早くこの場を離れろ！』

「え？」

戒翔の言葉と同時に屋上の中心…噴水が置かれた場所が急激に歪み何かの胎動の様な物が聞こえた。

「なんの音だ？」

『拙いな……こんな所で出現するとは』

「何が来ると言うのだ！」

『箒、其処から動くなよ？』

「え？」

《来ます！》

そして其処に現れたのは……

「此処が地上界か…なかなかどうして空気が魔界よりも空気が澄んでいるみたいだな…。」

黒い体躯に頭から二本の角を生やし背中から毒々しい翼を生やした異形の者…一般的に悪魔に分類される者であった。

『高位悪魔(ハイ・デーモン)…か。』

「おや？人間(ごみ)如きがわたし達の位(クラス)が解るのですか？」

『それだけの魔力に障気を故意に垂れ流してたら嫌でも解る』

「驚愕ですね～？君は其処にいる人間(ごみ)とは違うみたいですね～」

『……今、なんて言った？』

「おや解りませんか？其処にいるモノですよ？わたしの魔力に当てられて気絶しかけているゴミ『それ以上その汚い口を開くな！』おやおや、嫌われていますね～？」

『他の奴らに被害が及ぶ前に貴様には元の魔界に戻ってもらうぞ！』

「貴方は本当に興味深いですね。わたしは気に入ったモノを集めるのを趣味にしてますから貴方は殺さずにわたしのコレクションに加えてあげますよ。」

『出来るならやってみろ！』

「行きますよ！悪魔槍（デモニックランス）ッ！！！」

『氷楯（レフレクシオー）』

「貴方も魔道を使うのですか！」

『魔道は貴様だけが使える訳ではないと言う事だ』

「へぇ？じゃあこれならどう？闇の眷属達よ契約に従い我に仇なす敵を滅ぼす剣と成せ！」

『なっ！？馬鹿か！こんな所で大規模魔法なんて使用するか！？（拙い！）空間隔離固定術式……』

「遅いわよ！その剣、音となりて地獄の底より高らかに奏でよ！虚（ゼロ）無葬送歌（レクエム）」

『ちぃっ、間に合え！封時結界…同時に…絶対防御壁！』

その瞬間、屋上全体を薄黒い膜に覆われそれに続く様に大気を揺るがす様な爆発と衝撃が内部で起こった。

『クソが！こんな場所で大規模殲滅型魔術を普通に使うか？って箒は……脈はちゃんとある…呼吸も少し弱めだが気絶してるだけ…か。』

「成る程、貴方には驚かされてばかりね？今の一瞬で空間と空間を隔離する高等魔法、そして尚且つ後ろのゴミを護る為とは言え高度な全周囲型の防御壁を展開…。益々わたしは貴方を自分の物にした

いわね〜？」

『テメェみたいな野郎の物か？御免被るな。』

「あら失礼ね？こんな形(なり)をしているけど悪魔にも性別は存在します。
因みにわたしは性別で言えば女性よ？」

「単細胞生物ならいざ知らず人間(ホモサピエンス)やそれに近しい生態に雄と雌は存在するのよ？」

『テメェと生物雑学を語る気はさらさら無い。』

「つれないわねぇ？でもまたそんな所が可愛いわね？」

『寒気しか感じないぞ？さっさと貴様を魔界に還(かえ)してこの場の歪みを修復しないといけないのだからな…。』

「あの門(ゲート)を？」

『門(ゲート)…だと？』

「貴方は空間の歪みと言うみたいだけどアレを使うわたし達としては出入り口の様なもので総称でアレを門(ゲート)と呼称しているの。」

『我々って事はそれなりの数がこの世界に来ているって事だな？』

「そう考えてくれて良いと思うわよ？もっとも何かしらの力が働いているのか知能がある程度……というか人語を解せない輩は出られないみたいね？使い魔（アガシオン）を代わりに出した所門を潜る前に消滅しちゃったしね？」

『其処まで教えて良いのか？』

「戦う気は元々無いし、貴方は気に入ったしね？あっ、そうだ！こっちの姿が嫌いなら人間化した方がいいかしら？」

『……好きにしろ。俺はさっさと歪みの修正を「そんな物わたしが出た時に塞いじゃったわよ？」……は？』

「だってあのままだったら他の奴らが出て来たら色々と楽しみが減っちゃうでしょ？」

『貴様の考える事は解らんな…。』

「そう言えば自己紹介がまだよね？わたしの名前はゴモリー…宜しくね♪」

『ゴモリー……ソロモンの書の悪魔にして72柱の1体で確か愛を司り召喚者に愛し方を教える…だったか？』

「あら御存知？なら話は早いわね。どう？わたしと契約しない？勿論魂を取るなんて事は無いから安心して良いわよ？わたしは貴方が気に入ったから特別出血大サービスよ♪」

『考えている事が全く読めないな…。本当に何を考えているんだ？』

「そうねぇ？強いて言うならこっちの世界に７２柱の何人かが此方に来ているから様子見気分って所かしら？」

『……頭が痛くなってきたυ７２柱は存在しているだけで常人に与える影響は計り知れないと言うのに……』

「確か……ダンタリオンにガープでしょ？それとグラシャラボラスとラファエルにルシファーそして最後にサタンが来る予定になってるわよ？」

『どんなメンバーだよυそれだけいれば世界が滅ぶぞυ』

「殆どの悪魔や魔神の奴らは観光気分で来るかもね？」

『物騒な観光になりそうだな…』

「厄介なのはグラシャラボラスかしらね？アイツだけは血を狂気に近い感情で欲していたからね。」

『確か心を読み更にはそれを意のままに変える力……だったか？』

「そうよ。例えば愛し合っている人間の心を操り殺し合いをさせたりする事だってさせちゃう事も戸惑いもなくやるイカレた魔神ね…。」

『かなり厄介だな…。出会い頭で叩き潰すのが得策…か？いや……閉鎖空間を形成して……待てよ？それよりも……』

「ちょっと！こっちを無視して考え事をしないでくれるかしら？」

『……ん？あぁ、悪い…っていつの間に人間の姿になった？』

戒翔が思考の海に片足を突っ込んだ状態から戻るとゴモリーの姿は最初の悪魔の姿から抜群のプロポーションを持ったブロンド美女へと姿を変えていた。

「貴方が思考の海に飛び込む少し前よ？名前はゴモリーのままだとバレちゃうから……沙羅…如月沙羅（きさらぎさら）はどうかしら？」

『如月沙羅…か。良いんじゃないか？後はカモフラージュとして俺の家に居候してたと言う事で学園の教師にでもなるか？保険医として』

「貴方が毎日来てくれるなら良いわよ？」

『そんなに頻繁に怪我する訳ないだろ υ』

「つれないわねぇ？」

『勝手に言ってろ。戸籍云々はこっちでどうにかしておくから面接は自分でなんとかしろよ？』

「その位解ってるわ。それじゃ、またねぇ～♪」

そう言い残してゴモリーもとい如月沙羅は風景に溶け込むがごとくにして姿を消すのであった。

『さて……これが序章に過ぎないのかはたまたまだ序章にすらなっ

てないのか解らんが…これからソロモンの72柱の悪魔や魔神が出ると言うのか……サタンやルシファーにラファエルなら神魔界大戦時での面識があるから良いが問題は他の72柱のメンバー…か。問題解決の先が思いやられるな』

そして戒翔は気絶した箒を背負うと結界を解除してから屋上から去って行った。

第二話　敵の襲来？いや憑かれただけｕ（後書き）

御意見御感想をお待ちしております。

第三話　クラス代表決定戦

ーーーＩＳ学園第３アリーナ　ピットーーー

「準備は良いか？」

『良いも悪いも無い。何時でも最高な状態だ。』

「頑張ってね～♪ちーちゃんと箒ちゃんの三人で応援するからね～♪」

今俺は箒と千冬…此処では織斑教諭と篠ノ乃博士のその三人と一緒にアリーナ内のピットにいる。箒とのやりとりからあっという間に一週間と言う日は過ぎた。なんだ？その間の事？作者の技量不足と言う事にしておいてくれ。

「戒翔兄さん、大丈夫なのか？相手は仮にも代表候補生だぞ。」

『そんな事を気にしているのか？』

「そんな事！そんな事とはなんですか！人がせっかく心配していると言うのに！戒翔兄さんは……」

「箒、少し落ち着け。戒翔、アレは使うなよ？」

『言われなくともクラス代表決定ぐらいで出す代物でもないさ。試験の時は千冬が相手だから出したんだからな？アレは単体で戦争を起こす事が可能だからな…そう易々と出して良い物ではない事ぐら

い解っている…それに今回はアルカインで行く……向こうは第3世代で来るが此方はあのシステムと単一仕様能力のお蔭とアルがいる為に第7か第8世代に相当するからな』

「戒翔さんの才能も含まれないんですか？」

「……あまりやり過ぎるなよ？」

「かーくんは偶にやりすぎるからね～♪」

『言われなくとも俺の全力の１０％で行くから心配するな。と言うかそんなに信用ないのか？』

「当たり前ですよ？戒翔さんはこの6年もの間連絡もなく音信不通で行方知れずだったんですから姉さんや織斑先生がどれだけ心配したと思ってるんですか。」

《その通りですね。悪いのはマスターですよ？》

俺の言葉に3人はダメ出しをする。確かに白騎士事件の時に世界の修正力に負けて6年の時を飛んでしまったのを言えないからしょうがないが千冬と束には今度説明をさせられるだろうなｕ

「かーくん、それってかーくんのＩＳ？束さんはかーくんがＩＳを持ってるのを知らないよ？」

《初めまして。わたしはマスターのＩＳの管理をしています。正式名称をアルカイン…愛称はアルと言います以後お見知り置きを》

『あの時は仮初めの似非ＩＳを使っていただけで専用機は幾つか持っているぞ？中学の時に見せて貰った理論に俺なりの技術理論を組

み込んで作製しそれ等の管理をしてくれるのが今この指輪型のアルとネックレス型の８で二人で別々のタイプの専用機を管理して貰っている』

「束さんびっくり～！かーくんって身体能力でちーちゃん以上なのにあの理論を少し見せただけ自作の専用機を造っちゃうなんて…しかも人工ＡＩに言語機能に学習機能もあるなんて凄いね～！」

「幼なじみとしては戒翔が規格外な事は今に始まった事では無いが……」

「戒翔さんですから」

《マスターですしね》

『人を人外みたいに言うなよなぅ』

「相手を待たせているし話はまた後にしておくか。……まだ話し足りないが」

『そうだな……行くぞ！アルカイン…セット！』

《ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！》

その瞬間、戒翔の身体を眩い光が包み込んだ。そして、光が収まると其処には黒い全身装甲型（フルスキンタイプ）のＩＳ……アルカインが佇んでいた。それは渡り歩いた世界の１つに存在する兵器…ＡＳ（アームスレイブ）の１つでとあるシステムを積んだ特殊な機体、名称をアーバレストその機体の原典…兄弟機とも言うべきその機体は白銀ではなく全てを呑み込むかのような漆黒の色をしていた。

『じゃあ、行ってくる。』

「勝って下さい。」

「ちーちゃんと箒ちゃんに束さんが応援してるからね～♪」

「戒翔、油断するなよ」

『俺がする訳ないだろ？アル、タスラムとカオスにフィアーの事前呼び出しの準備を頼む。覇槍…ランス・オブ・ラグナロク！』

戒翔が喋ったその瞬間、右手に2メートルを超える突撃槍が量子展開される。

『行くぞ！』

そしてピットにあるカタパルトから戒翔は飛び立ち、セシリアと対峙する。

「良く逃げずに来ましたわね。その事については褒めてさしあげますわ。」

『そんな事で一々誉める事ては無いだろう。さっさと始めるぞセシリア・オルコット』

「このわたくしの降参と言う慈悲が解らないなんて！……良いですわ全力で倒して差し上げますわ！」

『はっ！倒してみろ……行くぞ！』

戒翔はそう言うと背中に機体の１．５倍はある翼…イカロスを量子変換し展開しながらセシリアへと接近する。

「そう簡単に接近を許すほどわたくしは甘くはありませんわよ！」

セシリアはそう言いながら青を基調とした専用ＩＳ、ブルーティアーズのリアスカートから４基の遠隔操作兵器ブルーティアーズを射出する。そしてこの装備こそＩＳの名前の由来そのものでもある。

『ＢＴ兵器か……だが…狙いが甘い！！！』

「なっ！」

戒翔は後ろに目があるかの様に確認もせずにビームを避けその後も立て続けに襲い来るビームを悉く避けなおもセシリアに接近する。

『そこぉッ！』

「きゃあッ！？」

戒翔の振るった覇槍をセシリアは防ぐもその威力に悲鳴を上げながら吹き飛ばされる。

「この！調子に乗って！」

レーザーライフル、スターライトＭｋ－？をセシリアは正確に戒翔の駆るアルカインに照準を合わせるがその全てをかわされていた。

『狙いが粗くなってるぞ！』

「逃げ回ってばかりの人が言ってくれますわね！」

『ならば今度は此方からだ！アル、Λドライバ！』

その瞬間、目に見えない何かがアルカインを包む。

「虚仮（こけ）脅しなんて足掻くなんて見苦しいだけですわ！」

そして、セシリアがスターライトを構え、戒翔目掛けて撃つ。直撃コースの筈の物を戒翔は避けようともしなかった。

「なっ！？」

そして、次の瞬間、セシリアの放ったレーザーは自ら戒翔を避けるかの様に逸れた。それを見たセシリアは驚愕の声を観戦しているクラス全員を代表したかの如く上げる。

「なっなんですのそれは！？」

『教えると思うか？』

「くっ！」

『さっきので無駄と解らなかったのか？それに動作が遅い』

「なっ！？（何時の間に！？）」

セシリアはスターライトを構え戒翔に向けるがその前に既に戒翔はセシリアの懐に何時の間にか移動していた。

『チェック…メイト！！！』

戒翔は拳をセシリアに合わせる瞬間、爆発が起きた。

《勝者黒逸戒翔》

アリーナに設置されたスピーカーから聞こえる声に戒翔は構えを解き爆発の影響で気絶し落ちてくるセシリアを素早く地面に回り込みお姫様抱っこで抱きかかえてピットに戻る。

『いま戻……三人共…何故睨むんだ？しかも山田教諭まで』

「「「「それは自分の胸に聞け（いて）（いて下さい）！！！」」」」

『意味が解らんυ次の相手は……千冬の弟だったな。準備は出来ているのか？』

「勿論だよ～♪いっくんの白式の調整は束さんに掛かればちょちょいのちょいだもんね～ブイブイ♪」

戒翔の質問に何故か説明しながら踊って説明をする束

『流石としか言えないな…。』

「かーくんのタイピングの速度に流石の束さんも負けるけどね～」

『俺は異常だからな。』

「次は一夏との模擬戦闘だな。」

『楽しみに見ていろ…と言うか姉としては弟の心配はしないのか？』

「相手が戒翔では仕方ないだろ」

『それで納得してしまうのはどうかと思うぞ？』

「戒翔さんだから仕方ないですよ。」

『ハァ、覇槍を解除。続いてフレイムを換装固定し龍騎兵（ドラグーン）と龍牙兵（ファング）を換装』

戒翔の言葉に連動し、アルカインの持っていた長槍が量子変換されて消え、新たに量子変換され展開された武装は両腰に刀が二本とその下のリアスカートに八基の牙を模した兵器に背中には大天使の様な十二枚の翼が現れる

「おぉ～♪また新しい武器だ♪」

『こいつはセシリアのブルーティアーズと似てはいるが此方の方が性能は上だ。』

『根本的な所は違うが設計上ブルーティアーズに似てはいる……が此方と彼方の違いと言うのは操縦者が意識を集中しなければいけな

いが此方の武装はその欠点を量子インターフェースを用いて操縦者の脳波に反応して行動する。それにより意識をそちらに向ける必要性もなく戦闘行為に支障を出す事もない。』

「量子インターフェースか～♪束さんも考え付かなかったね～。流石かーくん♪」

『それじゃ、行ってくる。』

「行ってこい！」

『黒逸戒翔！アルカイン出撃る！』

そして、カタパルトから飛び出してその勢いのまま飛翔する。

「戒翔さん待ってましたよ。」

『待たせたな…一夏。さぁ、始めよう』

そして一夏が乗る白式と戒翔の乗るアルカイン……白と黒が激突した。

第三話　クラス代表決定戦（後書き）

御感想と御意見をお待ちしております。

第四話　一夏ＶＳ戒翔

ＩＳ学園のアリーナでは織斑一夏の白と黒逸戒翔の黒が何度も交錯する。

『ふむ…なかなかどうして、持ちこたえる物だな…。』

「当たり前だ、この日の為に…そして誰かを護る為に鍛えてきたんだからな！」

『……そうか…だが、そう簡単には行かないぞ？それに一次移行（ファーストシフト）が完了するまでコレが持ち堪えられるか…な！』

戒翔はそう言うと瞬時加速（イグニッションブースト）で距離を一気に空けると背中から１２基ものＢＴ兵器を射出する。

「げっ！」

『行くぞ、一夏！』

「くっ！（やっぱり戒翔さんは凄いな…俺はまだあの人の足下にすら届いていない事が解ったけど、このまま黙ってやられない！一矢報いる為にも）負けられないんだぁッ！！」

一夏は戒翔の瞬時加速を見様見真似で使い距離を詰め、長刀を振るう。

『っと…真似だけで簡単に行くとは…な。』

戒翔はそう言いながらボルケーノとインフェルノで一夏が振るう長刀を弾くとＢＴ兵器…ドラグーンで一夏に攻撃をする。一夏は不規則かつ縦横無尽に動き回るソレに翻弄されていた。

「なっ、このっ！セシリアのとは違いすぎるだろ、コレッ！」

『なんだ、コレだけでギブアップか？』

「んな事するかよッ！！」

『なら、コレを耐えて見せろ、一夏ぁッ！！！』

戒翔はそう言って一夏の周りを飛ぶドラグーンで攻撃を開始する。

「くっ、このぉッ！」

そんな一夏は多方向から迫り来るビームをギリギリで躱すが、それでもシールドエネルギーが徐々に削られていく。

『良く躱すがそろそろ残量心許ないだろ？』

「ま、まだまだ！」

『コレで終いだッ！！』

戒翔が叫び、ドラグーンによる一斉射撃を始めようとしたその瞬間（とき）

一夏と白式が光に包まれた。

『……始まったか』

「コレが…白式」

『一次移行が済んだ様だな…これで白式は正式にお前の専用機となった訳だ一夏』

光が収まり、一夏が白式の形が変わった事に驚いていると攻撃の手を止めて静観していた戒翔が一夏に話しかけた。

白式の形は最初の無骨な感じからより洗練され、滑らかな曲線によりスリムに、そしてシャープな形となりどこか中世の騎士を思わせる形となっていた。そして変わったのは姿だけではなかった

「雪片…弐型？（千冬姉の使っていた武器と同じ名前？）」

手に持った長刀も姿を変えていたのである。その形は日本刀の様なそれは反りに加えて長さもあり太刀と言った方がしっくりとくる物となり、鎬の部分からは呼応するかのようにして僅かな光が漏れでていた。妙に機械的な造りがそれをＩＳ用に造られていた事を示していた。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

『ふっ、そうか』

「俺は…俺の家族を護る！もう、護られるのは終わりにする。」

『なら、どうする？』

戒翔の言葉に一夏は静かに目を閉じ、次に開けた時、目には強い覚悟を秘めた目をしていた。

「まずは、千冬姉の名前を守る！」

一夏は雪片弐型の刃の部分をスライドさせると光刃が現われる

『フフッ、でないと千冬に笑われるからな？』

「行くぞ！」

『来い！！』

そう言って一夏は雪片弐型を中段に構えて突撃し、戒翔はそんな一夏をインフェルノとボルケーノで迎えうつ。

《試合終了！勝者黒逸戒翔》

「へ？」

『む？』

しかし、それは意外にも試合終了のブザーによりアッサリと勝負は決まった。それに対して一夏はマヌケな声で、戒翔は不粋な邪魔をされた事に対して対照的とは違うが２人は声を上げるのであった。

ーーーＩＳ専用ピット内ーーー

「よくもまぁ、持ち上げてくれたものだな？それでこの結果がコレか、大馬鹿者」

ピットに戻り合流した後に待っていたのは腕組みをして此方を見る織斑千冬であった。そしてその第一声がキツい物であった

「武器の特性を考えずに使うからこうなるのだ。身を持って理解しただろう。明日からは訓練に励む事だな、暇があればＩＳを起動しろ。いいな？」

「……はい」

一夏はただ、そんな千冬にそう返すしかなかった。ああ言った手前でこれである為に格好がつかずバツの悪い顔をしていた。

その後は山田教諭による簡単な説明とＩＳに関わる事で触れる規則が書かれた説明書の様な物を手渡される。勿論だがこれもまた広辞苑並に分厚いのであった。

『一夏も大変だな…』

「そう言うかーくんもこれからが大変だよ？」

『何故だ？』

静観していた戒翔はボソリと呟くがそれを聞いていた束が意味深な事を告げると戒翔はさも意味が解らないという風な顔をしながら束に聞く。

「だって、ちーちゃんと同じＩＳ適性Ｓランクでちーちゃんは嫌うけど戦乙女（ヴリュンヒルデ）と同等かそれ以上とされる皇帝（カイザー）が忽然と行方を眩ましてたのに再び現れたんだからね？」

『俺の注目度は世界規模かよｕ』

束の衝撃的な言葉により戒翔はげんなりとするが世界に移動した直後の事と周りの人間の発言からある程度の事は予測はしていた筈である。

「仕方ないよ？かーくんはちーちゃんとは違って自作のＩＳで正体を隠さずに一万発ものミサイルを２人だけで消し飛ばしたからね？因みにちーちゃんが二千発でかーくんが八千発ね？」

『めんどクセェｕ』

「それはしょうがないよ、かーくんのスペックは規格外だしＩＳも似たような物だからね？」

「確かに規格外ではあるが、それが国に対しての抑止力にもなっているから馬鹿には出来ないがな…。」

『織斑教諭も何気に酷い事を言いますね？』

「そうか？戒翔にはそれで十分だと思うぞ？」

『俺を何だと思っているんだよｕ』

「規格外？」

「大魔神？」

「バグキャラ？」

「人外かな～？」

上から一夏、箒、千冬、束とそれぞれが言う。

『取り敢えず……』

「ワキャーー！？いたい、いたい！か、かーくん！天才な束さんの頭が真っ赤なトマト的な事になっちゃうよ！？」

戒翔は徐に手を束の頭を鷲掴みにして万力の様に力を入れる。それに対して束は悲鳴を上げ、戒翔に抗議した。

『いっそそのまま潰れろ』

「に〝ゃぁぁーーー！？」

戒翔はそう言った瞬間、束の絶叫と共に嫌な音がピット内に響くのであった。

第四話　一夏ＶＳ戒翔（後書き）

御意見と御感想にアドバイスなどがありましたらお願いしますｏ（、▽、）ｏ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7071y/

少年の異世界戦記〜ＩＳ編〜

2011年12月9日01時05分発行